

第8回

国道25号(現34号線)の3橋
(一之橋・中之橋・鎮西橋)

—長崎市への入口を飾る昭和初期の秀逸なコンクリートアーチ橋—

長崎大学名誉教授 岡林 隆敏

長崎市と主要都市を結ぶ幹線道路(長崎街道)は、25号国道となった大正9年(1920)以降も、桜馬場、新大工通り、馬町から長崎県庁に至り、特に桜馬場から新大工通り間は狭隘な路線であった。明治時代の荷馬車や人力車を想定していた道路は、大正時代になると、自動車の普及により、幅員の拡大と直線化が要求されるようになった。長崎市から郊外に抜ける日見峠の切通しは、大正15年(1926)日見隧道が開削され、曲線の少ない道路に改修された。その後、昭和9年(1934)の長崎産業観光博覧会を契機に、新大工通りを通る国道を南側に移設する改修工事が行われ、新しく路面電車も馬町から蛸茶屋に延長された。

この新しい国道の中川町から馬町に至る間に、中島川を横断する橋梁2橋と、西山川(中島川支流)を横断する1橋が架設された。これらの橋に、長崎市へ入るゲートの役割を持たせ、最初の橋は「一之橋」、次に「中之橋」、最後の橋は鎮西大社諏訪神社の前にあるので「鎮西橋」と命名された。

上の写真は「一之橋」の親柱と高欄である。親柱の高さは3mほどあり存在感のある規模と意匠となっている。橋梁の構造はアーチ部材と路面の間が空いている開腹アーチである。中の写真は「中之橋」の側面である。親柱と高欄は、一之橋と同程度の規模があり、重厚な存在感を示している。アーチの構造は充腹アーチで、アーチ形態は楕円型となっている。下の写真は、側面から見た「鎮西橋」である。御影石を張り、石造橋のように見せている。橋体と路面の間に梁の頭を突出し、木造橋の造作を見せている。また高欄は木のように丸く削り、親柱は諏訪神社に因んで灯籠の形をしている。この橋の意匠設計は建築家武田五一(京都帝国大学教授)による。

国道34号線(旧25号国道)は戦後拡幅され、各橋梁に新橋が併設されたが、旧上り車線側の親柱と高欄は新橋の上に移設されており、道路から見ると一体の橋となっている。それぞれが異なるアーチ形状である橋梁形態的な面白さもあるが、2m~3mもある堂々たる親柱は、まさに県都長崎の玄関口を飾るのにふさわしい。

これらの3橋は、昭和初期の様式を色濃く残した、長崎のゲートを飾る堂々としたコンクリートアーチ橋である。



一之橋



中之橋



鎮西橋